

## 弘前市長勝寺（弘前藩津軽家菩提寺）の調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 浩介 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/2925">http://hdl.handle.net/2297/2925</a>

行為に伴い、発掘調査を実施している。その多くは寺院境内での本堂・位牌堂などの改築に伴うものであり、その性格上、費用・面積・期間など限られた条件の中で調査が行われている。そのため得られる成果も限られたものとなっているのが現状であるが、今回発表する長勝寺はその中では比較的まとまった面積で調査を実施しており、一定の成果が得られている。ここではその調査の概要と共に、雑駁ながら若干の考察を述べる。

## 2. 歴史的環境

### 1) 津軽氏と弘前城下の沿革

延徳3年(1491)、三戸南部氏は津軽西浜における安藤氏への押さえとして、南部氏の一族光信を岩手県九戸郡下久慈より種里城(現西津軽郡鱒ヶ沢町種里)へと配置した。大永6年(1526)、初代光信が種里城で没すると、嫡男盛信は大浦城(現中津軽郡岩木町大浦)においてその家督を継いでいる。永禄10年(1567)に四代為則の跡を継いだ為信は、元龜2年(1571)、三戸南部氏に反旗を翻し石川城(現弘前市石川)を急襲、津軽郡代南部高信を自害に追い込む。これ以後、為信は津軽一円の支配へと歩みを進め、天正19年(1591)、豊臣秀吉より「津軽右京亮」の名で朱印状を得たことにより、大名としての公認を得ることとなる。文禄3年(1594)、為信は居城を大浦城から堀越城(現弘前市堀越)へと移し、それと同時に寺社・家臣団・商工業者等をも移転させた。しかし、津軽平野南部の沖積地に位置する堀越城は、政治的・経済的な要衝ではあったものの、軍事的・地理的には脆弱であった。慶長8年(1603)、為信は領国経営の中心として高岡の地(現弘前)を選定し町屋の建設を命じる。慶長12年(1607)12月、為信は京都で没し、高岡での築城計画は二代藩主信枚の手に委ねられることとなる。

慶長15年(1610)、信枚によって着手された弘前城の築城は、翌16年(1611)にほぼ完成、同年信枚と共に寺社・家臣団等が堀越より移転する。その際、領国経営の中心地としての役割をより強固にするため、城下には諸寺社が計画的に配置されることとなった。弘前城の東北から北にかけては、八幡宮とその別当寺院真言宗最勝院、熊野宮、伊勢大神宮(神明宮)、西には浄土宗誓願寺、曹洞宗革秀寺、東には東照宮とその別当薬王院、浄土真宗・天台宗・浄土宗の各寺院が配された。南西台地上には、津軽領内より曹洞宗寺院三十三ヶ寺が集められ、長勝寺を僧録所として「長勝寺構」が形成される。長勝寺構には元和元年(1615)に、弘前城の南、現在の弘前市森町付近にあった茂森山を切り崩し、構内の沢を埋めた際に、東側に土居と壕、枡形が構築されており、より軍事的な役割も強化されている。

## 弘前市長勝寺(弘前藩津軽家菩提寺)の調査

岩井浩介(青森県弘前市教育委員会)

### 1. はじめに

弘前市教育委員会では近年、国指定史跡津軽氏城跡内に所在する寺院街「長勝寺構」の諸寺院の現状変更

## 2) 長勝寺の沿革

曹洞宗太平山長勝寺は、享禄元年(1528)、盛信が父光信の菩提のため種里村に創建された。その後大浦氏(後の津軽氏)の居城と共に、大浦、堀越へと移り、現在地には、津軽藩二代藩主津軽信枚が弘前城へと居を移すに伴い移転した。現長勝寺は、長勝寺構の形成と共にその西端に東面して建立され、寺領は200石、長勝寺構の僧録所としての役割を担った。

創建当初は本堂と庫裏のみであったと考えられるが、寛永6年(1629)に信枚によって三門、御影堂、回廊が建立され、その伽藍は一応の完成をみる。また、本堂の南には、寛永5年(1628)に為信正室(仙桃院)の霊屋である環月臺が建立されたことを皮切りに、18世紀中頃までに5棟の霊屋が建立される。伽藍配置は、東面する本堂を中心として、その正面に三門、本堂に向かって右側(北側)に庫裏、左側(南側)に禅堂(現蒼龍窟、明和2年[1765]建立願出)を配し、回廊がそれらの建造物を繋いでいたものと考えられる。

長勝寺の歴史は津軽氏と共にあるといってもよく、歴代藩主の信仰が厚かったことも想像に難くない。しかし、正確には津軽藩成立後は主たる菩提寺であったとは言い難い。京都で没した初代藩主為信は岩木川西岸の曹洞宗革秀寺の開基、二代信枚は現東京都台東区谷中の天台宗津梁院の開基(長勝寺には分霊墓として霊屋が建立)、三代信義は現弘前市新寺町の天台宗報恩寺に開基として祀られており、三代以降は菩提寺の主たる役割は、国元では報恩寺、江戸では津梁院、高野山では遍照尊院へと移っている。

## 3) 史跡の沿革

現在、長勝寺は国指定史跡津軽氏城跡(弘前城跡)長勝寺構内に位置する。史跡津軽氏城跡は、種里城跡(平成14年指定)、堀越城跡(昭和60年指定)、弘前城跡(昭和27年指定)より成り、弘前城跡については更に、弘前城跡・長勝寺構・新寺構の3ヶ所より成る。種里城跡・堀越城跡・弘前城跡については、当初より公園としても利用されていたこともあり、公有地化が行われると共に史跡整備に伴い継続的な発掘調査が実施されている。しかし、長勝寺構・新寺構については現在も生活・信仰の場として利用されており、保存・整備方針について見直していく必要に迫られている。

## 3. 調査の概要

調査は2001年度と2002年度の2ヶ年にわたり実施された。2001年度は南面する庫裏東側の住宅建設予定地を対象とし、調査面積は172.5平方メートル、2002年度は庫裏裏手(北側)の位牌堂建築予定地を対象とし、調査面積は244.7平方メートルである。調査区内からは回廊跡、竪穴遺構6基、土坑30基、溝跡5基、土器埋設遺構1基、ビット182基を確認した。検出さ

れた遺構は全て自然堆積層である基本土層第1層(黒色砂質土)及び第2層(黄褐色砂質シルト土)上面で検出されており、上面の遺物包含層は削平されてしまったものと思われる。これらの遺構は古代のもの、近世のものに大別される。以下にその概要をまとめる。

### 1) 回廊跡

調査区南側の拡幅区で検出された。通路部分である回廊内の整地層は、断面形が台形を呈し、上面幅2.2-2.3m、下面幅2.4-2.5m、厚さ10-15cm前後である。南縁部には土留めと思われる礫が埋設される。北側には真々柱間1.85mの柱穴列が検出された。なお柱穴には柱痕が残存していたが、保存のため完掘していない。

回廊は文献資料から寛永6年(1629)に二代信枚によって建立されたと考えられており、絵図等では本堂、庫裏、三門、禅堂を連結している様子が描かれている。藩庁日記では18世紀から19世紀前半にかけて、約30年毎に何らかの修復が行われていることも判明しているが、その後、太平洋戦争末期に延焼を防ぐため取り壊されており、今回確認された遺構もその時のものと考えられる。

### 2) 土坑

土坑30基のうち、7基は古代後半に属するもので、うち3基は井戸跡である。その他の土坑はおおむね近世以降に属するものと思われる。これらのなかで規模や湧水の存在等から近世の井戸跡と想定されるものは4基である。

S K 11・14・21は古代後半に属する井戸跡である。いずれも素掘りで底面は透水層まで達する。S K 14には上屋と思われる柱跡が付属する。

S K 4・16・29は近世、S K 15は近代に廃絶された井戸跡と考えられる。いずれも湧水が激しく底面は確認できていない。S K 15を除き、覆土中に粘土層がみられる。なお、確認した深度内の土層断面上では井戸側の痕跡は確認できていない。形態はS K 4が円形、他は方形を呈し、壁面はほぼ垂直である。S K 29は一辺2.6mの方形を呈し、四隅に柱跡、また周囲に柱穴列を伴う。覆土からは多量の木製品が出土した。

近世以降の井戸は重複関係等から、S K 29(18世紀末)、S K 4・16(19世紀前半)、S K 15(19世紀後半以降)と変遷したと想定しており、庫裏の北側から東側にかけて位置を違えながら構築されていたと考えられる。また、S K 4は18世紀中頃と想定される絵図に描かれた井戸とその位置が非常に近い。しかし、文政8年(1825)の絵図には井戸の表記が無く、廃絶時期とも開きがあることから、絵図の井戸と同一のものであるかは断定し得ない。

### 3) 竪穴遺構

竪穴遺構は2002年度調査区でのみ検出した。ST1-4

は貼床を有するもので、うちST1・2は方形または長方形を呈すると思われる近世後半の遺構である。

ST5・6は近世の遺構としては最も古い時期のもので、ST6については近世初頭にさかのぼる可能性がある。出土遺物には肥前陶器、志野、越前、中国産染付、かわらけ等がある。ST5・6ともに不整な楕円形を呈し、底面は平坦、柱跡は非常に少ない。確認当初より長勝寺構創建期に伴う可能性がある遺構として、工房等の可能性も想定し調査を実施したが、現段階ではその機能については不明である。なお、本遺構は位牌堂基礎深度下に位置する遺構のため、部分的な掘り下げにとどめている。

#### 4) その他

溝跡は古代と近世のものがある。土器埋設遺構は古代後半のもので、土師器甕の胴部下半が確認された。ピットとして扱ったもの多くは柱痕を有する柱穴跡である。現段階ではその精査ができていないため、その状況は不明である。

2ヶ年の調査により、長勝寺境内の様相が僅かずつではあるが判明してきたことは大きな成果といえる。だが、境内の空間利用の様相解明には、遺構・遺物の精査とともに、文献資料や絵図など検討しなければならない課題が山積している。今後更に検討を加えていくこととしたい。

#### 参考文献

岩井浩介

- 2002 「第一章第二節 長勝寺と津軽家の概要」  
(財)文化財建造物保存技術協会編著『重要文化財 津軽家霊屋五棟保存修理工事報告書』p.p.2-6.

弘前市教育委員会

- 2003 『史跡津軽氏城跡(弘前城跡)長勝寺構  
長勝寺発掘調査報告書』

#### 考古学大会参加者

- 教 官 : 佐々木達夫、高浜秀、中村慎一  
外来者・卒業生 : 相羽重徳、岩井浩介、岡部千真、  
神田健一、北出太郎、酒井康介、滝川重徳、  
辻森由美子、中本寛、西村昌也、原田幹、  
本田和裕、山下平重、湯尾和広  
大 学 院 生 : 西野範子、松永篤知、西森正晃、酒井中、  
業天唯正、高見哲士、田中範裕、廣田典之、  
松井みはる  
学 部 生 : 佐藤こずえ、庄田孝輔、田中智絵子、  
富樫陵、不破透、吉田風太、林宗偉、  
糸口佳孝、木村水保、佐藤祐子、杉浦文、  
杉本芳江、長屋有香、成田弥生、浜田景子、  
菱沼大介、宮崎浩輔、猪股周一郎、

大塚ゆめ子、加藤徹、小泉多恵子、  
後藤崇文、高松与理子、長岡けやき、  
平尾雅之、矢島智之